

2012年の北朝鮮

平成25年3月



公益財団法人日本国際問題研究所
The Japan Institute of International Affairs

は し が き

本報告書は、平成24年度国際問題調査研究・提言事業「2012年の北朝鮮」の研究成果を集成したものです。

本研究会では、自らにとっての転機となることを公言してきた—そして実際には、おそらく自身にとってもイレギュラーな形で新体制への移行が行われることとなった—2012年を迎えて、北朝鮮においてなにが生じ、いかなることが起きているのかを知ることを目的として、この1年間を使って政治・経済・外交の各側面からの分析を行ってまいりました。特に、北朝鮮の「^{いま}現在」という、明確にそこに存在していながら、いざそこに分け入ろうとするとややもすれば茫洋たるイメージの中に拡散・埋没してしまいがちな対象に様々な角度から切り込んで「切片」を取り出し、なおかつそれらが一つの明確な像を結ぶように図ることが全参加者の共通の認識であり、まさにこの点が本研究会の特徴をなしています。政治・経済・社会における各事象の相互作用が総体としての国内・対外政策に帰結するという点はこと北朝鮮においてもなんら変わるところはありません。したがって、たとえば後継体制の動向という、社会における最大の関心事に目を向ける際にも、単に指導者の動静のみをカバーすれば事足りるというものではもとよりなく、それがいかなる要素・いかなるアクターの「合力」であるのかに注意を払う必要があります。そしてそのことは、核問題、対外関係、経済の実態といった他のトピックを取り上げる際にも同様でしょう。このように、総体としての北朝鮮を常に視野に入れながら各トピックに分け入ること、しかして各分野に埋没することなく全体像を描くこと、これこそが北朝鮮の現状を描く上で有用な手立てとなり、同時にそこから各事象に対するより深い理解も得られる、というのが本研究会の目的意識であります。そして各分野の専門家の手になる分析の集合体である本報告書が、各トピックについて知る「よすが」となるのみならず、通読したときにそこから何らかの「北朝鮮像」が浮かび上がるような面貌を整えたものとなること、これが私どもの最終目的ということになります。本報告書を繙かれるみなさまにこのような試みが「響く」ことがありましたならば、これにまさる喜びはありません。

なお、本報告書に掲載された記述内容はすべて各執筆者の個人的見解に依拠しており、当研究所の立場を代表するものではありません。

最後に、ご多忙のなか本研究会のためにご参集くださり、報告書の作成にご尽力いただいた参加者各位、そして研究会の運営にあたりご協力を賜りましたすべての関係者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人 日本国際問題研究所
理事長 野上 義二

目 次

報告書要旨	……	1
第 1 章 金正恩時代の国内政治について	平井久志……	5
第 2 章 金正恩政権と軍事停戦体制 —「閏日合意」と対南関係の展開—	倉田秀也……	27
第 3 章 北朝鮮の 2012 年 —経済の視点から—	三村光弘……	41
第 4 章 2012 年も引き続き経済関係を深化させた中朝	堀田幸裕……	55
第 5 章 南北経済関係	室岡鉄夫……	75
第 6 章 北朝鮮 CNC 化政策の諸相 —「先軍時代の経済建設路線」具現化の試みとその含意—	飯村友紀……	87
第 7 章 北朝鮮の対外政策	伊豆見元……	103
第 8 章 オバマ政権のアジア太平洋重視政策における 対北朝鮮政策の位置づけ	中山俊宏……	113
第 9 章 中朝関係 —中朝関係の構造と変容—	平岩俊司……	123
第 10 章 ロシアの北朝鮮政策 —露朝関係の動きを中心に—	兵頭慎治……	135
第 11 章 総括と提言： 北朝鮮のミサイル試射・核実験と日本の対応	小此木政夫……	147